
祭礼研究の軌跡

中村孚美と米山俊直の祭礼論を事例として

谷部真吾

1. はじめに

現在の日本には、「祭礼研究」と通称されるジャンルが存在する。字義通り解釈するならば、祭礼研究とは祭礼を研究する学問分野ということになる¹⁾。では「祭礼」とは、いったいどのような現象をいうのであろうか。すでに多くの研究者が指摘しているように、祭礼の定義は柳田國男の『日本の祭』の中で行われた。彼によると、祭礼とは祭りの一種であり、風流と見物人が存在するものであるという〔柳田1998:378-382〕。また、そうした祭礼が生まれた背景には、中世以来の都市文化の力が影響していたとも述べている〔同:392〕。このような柳田による祭礼の定義は、現在でも頻繁に引用されるものであり、その意味では優れた定義であるといえる。だが、興味深いことに、そのような定義がなされたからといって即座に祭礼研究が開始されたわけではなかった。事実、『日本の祭』を一読すればわかるように、この書は祭礼という現象あるいは概念自体の検討を主要テーマとしたものではない。伊藤幹治もいうように、『日本の祭』の中で柳田が研究の中心に据えたのは、物忌みや精進、直会といった神と人との交流の局面であり、日常の秩序や規範からはみ出した行為は祭りから分化した祭礼として片付けられていたのである〔伊藤1984:55-57〕。

では、柳田によって定義はされたものの関心をもたれることのなかった祭礼は、いつごろから学問の俎上に載るようになったのだろうか。この問いに対して、福原敏男は、「日本の都市祭礼研究は、1960年代末から1970年代にかけて本格的に始まったといつてよい」としている〔福原1999:23〕。福原が指摘するように、確かにこの時代、祭礼研究は活況を呈する²⁾。その先陣を切ったのは、柳川啓一や藪田稔などの宗教学者であり、彼らはリーチやターナーなどの儀礼論を援用しながら日本の祭礼を分析していった。このうち、柳川が初めて祭礼調査を行ったのは、1963年7月の秩父神社の夏祭りであつ

た〔柳川1987:126〕。彼は、60年安保のデモに参加した経験を踏まえて、政治現象や社会運動を宗教と重ね合わせて見ることはできないのではないかと考えたという。その上で、「祭りを研究すれば、何か日本人の一つの生き方といったものがわかるのではないかという希望から」、祭礼の調査研究を始めたと述べている〔柳川1991:77-78〕。このようにして始められた柳川の祭礼調査には藪田も関与していた〔藪田1990:i〕。藪田は数々の刺激的な論考を發表し、やがて、それらの研究は『祭りの現象学』という一冊の本にまとめられる。こうした柳川・藪田らの研究について、伊藤幹治は、柳田以降、祭礼とか祭事と呼ばれ本格的に取り上げられることのなかった日本の祭りの祝祭的側面が³⁾、欧米の人類学理論に触発された彼ら2人によって、やっと注目されることになったと評価している〔伊藤1984:68〕。その後、1970年代に入ると、中村孚美や米山俊直、あるいは松平誠、和崎春日などの人類学者や社会学者らによって祭礼研究が行われるようになる。福原敏男によると、それ以降、現在まで、祭礼研究は常に好ましいテーマの1つになっているという⁴⁾〔福原1999:24〕。

以上からすると、祭礼研究は、およそ半世紀ほど前から行われていたことになる。その間、確かに多様な研究が蓄積されてきた。しかしながら、すでに見た柳川・藪田らの研究を別にすれば、多くの研究がそもそも何のために始められたのか、あるいはそうした研究によっていかなることが明らかにされたのかについては、しっかりと検討されてこなかったのではないだろうか。そこで本稿では、祭礼研究の初期において活躍した中村孚美と米山俊直の研究を取り上げ、彼らの問題意識とその研究成果を明らかにしていきたい。このような作業は、今後の祭礼研究の充実を図る上で、決して無駄ではないと考えている。

2. 中村孚美の祭礼研究

2-1. 「町と祭り」の内容とその特徴

1971年、中村孚美は、「町と祭り——秋田県角館町の飾山囃子の場合——」という論文を日本民俗学会の機関誌『日本民俗学』77に発表する。ここでは、4章からなるこの論文の内容について見ていきたい。まず、「1. はじめに」では、この論文で事例として取り上げられる角館の祭礼についてのごく簡単な解説がなされた後、以下のような問題提起が行われる。

では、【角館の祭礼における山車の】曳きまわしは、どのように行われているのであろうか。何が曳きまわしをそのように面白くしているのであろうか。角館の祭りの特質は何であろうか。

本稿では、今までとかく見落とされがちであったこれらの問題を、やや詳しく追ってみようと思う〔中村1971:30、【 】は引用者〕。

こうした主張からもわかるように、この論文は、角館の祭礼における山車の曳きまわし方や祭礼の特質を明らかにすることを目的としていたのである。次に「2. 町と丁内」では町の成り立ちや祭礼を支えている組織についての説明が、また「3. 山車の運行」では準備から後片付けまでの祭礼行事に関する一連の流れが紹介されている。なお、ここでは、特に山車の曳きまわし方にかなりのスペースが割かれている。その意味からすると、この第3章は、問題提起の中にあつた「曳きまわしは、どのように行われているのであろうか」という問いに対する答えでもあつたといえる。

最後に「4. 結び」であるが、本章では曳きまわしを面白くしているのは何か、角館の祭礼の特質とは何かについて考察されている。まず、前者の山車の曳きまわしを面白くしている要因については、丁内同士の対抗、しきたりを踏まえた山車の曳きまわし、参画性（昔からのしきたりを時代にに応じてアレンジすることで、山車の曳きまわしなどに関して自分たちで工夫をこらし、計画を立てて参加すること）、頑丈な山車の構造、の4つをあげている。これら4つの要因は、何らかの形で「ヤマぶつけ」と呼ばれる行事と関係しているようである。ヤマぶつけとは、文字通りヤマ（山車）とヤマとをぶつける行事であるが、この行事は複雑な丁内同士の対抗関係と、「交渉」と呼ばれる、ときには3時間にもおよぶ長いやり取り（そこには種々の技術ないしかけひきを伴う）の果てに成立するようである。こうした角館の祭礼の特質は、どのようなものであろうか。中村は次のように指摘する。それは、第1に現代的なアレンジが見られる点にあるという。彼女によると、一般に山車や屋台を伴う都市や町の祭礼は多かれ少なかれ遊びの要素を含んでおり、角館の場合、その遊びの要素は古い町の組織やしきたりを現代的にアレンジすることにあるという。また、角館の祭礼の特質の2つめとして、中村は、次のように町の気風が反映されていることをあげている。

「交渉」におけるかけひきや粘り強さ——それは商家の主人としても大切な資質であろう——ひとつみても明らかなように、この町の気風がいかに反映されているのである〔中村1971:52〕。

以上が、角館の祭礼の特質なのだ中村はいう。

このように、「町と祭り」という中村孚美が最初に祭礼を扱った論文を見てみると、この論文が、どちらかといえば現象の分析よりも記述に力点を置いた内容となっていたことが理解できる。そうした「町と祭り」の特徴をあげるとすれば、次の2点に集約できよう。それは、第1に、祭礼を社会的な出来事として記述していることである。彼女

の記述は、どういった立場の人たちが、どのような機会に、いかなる行動をとるのかというところに重きがおかれていた。また、論文「町と祭り」の特徴の2つめは、祭礼に町の気風が反映されているとしている点である。このような視座を、中村以外の祭礼研究者の論考の中で見ることはほとんどない。そのため、彼女独自のものであるといえるのかもしれない。この視座については、後ほど、触れてみたい⁵⁾。

2-2. 「秩父祭り」と「都市と祭り」

「町と祭り」の翌年となる1972年、中村は秩父祭りと川越祭りを事例とした2つの論文、「秩父祭り——都市の祭りと社会人類学——」と「都市と祭り——川越祭りをめぐって——」を発表する〔中村1972a・b〕。これら2つの論文も、前節で詳しく見てきた「町と祭り」と似たような章立てとなっている(表1)。各論文とも、「はじめに」や「まえがき」で問題提起がなされた後、祭礼の運営組織や準備から後片付けに至るまでの流れが説明され、最後の「結び」において、その祭礼の特徴が列挙されるという共通性もっている。また、前節で「町と祭り」について述べた際、この論文の特徴として、祭礼を社会的な出来事として記述していること、祭礼に町の気風が反映されるという視座を有していることの2つをあげたが、これらについても1972年に発表された2つの論文の中に見て取ることができる。特に後者に関して、「秩父祭り」では、この祭礼への関与の仕方が各町内によって異なっていること、すなわち町内ごとにあるところは屋台ないし笠鉦を出し、別の町内は花火を上げる、あるいは神幸祭の行列にしたがうだけといったように、祭礼の中で果たすべき役割が町内によって違っている点に注目し、このような違いは「秩父の町が在郷町として発達してきたことと、無関係」ではなく、そうした祭礼のありようは城下町などのように統一的な計画のもとに作られた都市の祭礼と異なるとされている〔中村1972a:189〕。一方、「都市と祭り」においては、「この【川越】祭りの背景には、近世以来、商業の中心地として発達した川越の町の歴史が、おのずから、あらわれている」という〔中村1972b:382、【 】は引用者〕。こうした指摘からもわかるように、中村によって1972年に書かれた2本の論文にも、祭礼に町の気風が反映されるという視座を確認することができるのである。

そのような「秩父祭り」、「都市と祭り」という2つの論文を公にした後、中村は都市人類学の先行研究を整理するという作業に取りかかる〔中村1974a・b、1980、1984〕。この間、祭礼に関する論考は書かれていない。彼女が再び祭礼研究を行うようになるのは、1986年に発表された「博多祇園山笠——そのダイナミクスとアーバニズム——」であるが、この論文が中村の手による最後の祭礼研究となる。そこで、以降では「博多祇園山笠」をやや詳しく見ていくことにする。

表1 「町と祭り」、「秩父祭り」、「都市と祭り」における章立て

「町と祭り」	「秩父祭り」	「都市と祭り」
1. はじめに	1. まえがき ①祭りのヤマ、②市、③ 視角、④4つの層	1. はじめに
2. 町と丁内 ①町、②町内、③年番、 ④「若者」	2. 祭りの準備 ①祭りの衣裳、②屋台芝 居と所作事、③はやし手 をさめる、④虫干し	2. 祭りの概要 ①山車の出る単位、②祭りの運 営、③山車の曳き回し、④祭り の経費
3. 山車の運行 ①祭りの準備、②曳きま わし、③祭りのあと片付 け	3. 祭りまで ①例大祭連絡協議会、② 時の配分、③ナラシ（太 鼓）、④屋台の組立、⑤ 会所びらき、⑥役と役柄	3. 祭りの実際 10月13日 山車の組立と会所の 飾りつけ 10月14日 氷川神社参拝 10月15日 町内曳き 10月16日 山車の解体、収納と 会所のあとかたづけ
4. 結び ①丁内同士の対抗、②し きたりを踏まえた山車の 曳きまわし、③参画する 祭り、④頑丈な山車の構 造	4. 祭りの日 ①宮参り、②曳きまわ し・曳き踊り、③《お昼 食》、④屋台芝居の見物、 ⑤奉曳・オヤマ	4. 結び 鳶の活躍 華やかな祭りの衣裳 パレードとしての山車の曳き廻し 町内の重立ちの重要性和若衆の 補助的役割
	5. 屋台の解体と収納	
	6. 結び ①リーダーシップ、②時 の割りふり、③配置の問 題、④運行の技術、⑤細 分化と専門化、⑥ペー ジェント、⑦在郷町とし ての性格、⑧祭り与人	

2-3. 「博多祇園山笠」の内容とその特徴

「博多祇園山笠」は4章から構成されている。まず、「1. まちと祭り」において問題提起がなされる。そこで中村は、「小論では、主として——(中略)——祭りの運営の仕方を検討し、商都博多のアーバニズムの諸相を探りたい」と述べている〔中村1986: 161〕。こうした問題提起の後に、博多祇園山笠を支える組織（「流」という）と組織内の役職（町総代、取締り、赤手拭）などについての非常に簡単な解説がなされる。次いで「2. 祭り15日」では、7月1日から15日までの日程で行われるこの祭礼にまつわる一連の行事が説明される。さらに「3. 山を動かす」では、山笠を動かす際に各役職がどのような連携を見せるのか、山笠を速く動かすために必要なことは何か、山笠の魅力

とは何かといった問題について、インフォーマントの語りを交えながら記述されている。

最後に、「4. 祭りとアーバンティニー」においてまとめとなるが、本章はさらに細かく、「手順の図表」、「豪気と細心」、「フレキシビリティ」、「都市的洗練」という4つの節に分けられている。このうち「手順の図表」を除いた3つは、博多祇園山笠の特徴として中村が特に注目したものではないかと推測される。これらの節において述べられていたことについてもごく簡単に触れておくと、まず「手順の図表」で、この祭礼を構成する全行事・全作業内容が示される。しかし、この論文の中では、紙幅の関係で多くの部分を割愛せざるを得なかったとしている。また「豪気と細心」においては、取締りと呼ばれる役職に注目し、この役にはまさに豪気さと細心さが要求されると指摘される。「取締りは博多っ子の粋」ともいわれるが、博多において取締りは祭礼の場だけでなく日常生活でも通用する一つの肩書き・経歴なのだという。次に「フレキシビリティ」についてであるが、博多山笠の運営は、数多くのしきたりに則ってなされる。特に、町総代、取締り、赤手拭と呼ばれる役職の人々は、かなり堅くしきたりを守ってこうとしている。しかし、その反面、一般の人々にとって、しきたりとその運用の仕方はかなりフレキシブルであることが明らかにされる。さらに、「都市的洗練」では「博多式マナー」について述べられている。博多では「タダ酒で酔うな」といわれており、振舞い酒で酔うのは恥だとされているという。もちろん、もてなしを受ければ、余計な遠慮などせずさっさといただき、会話をはずませ、場を盛り上げ、頃合を見計らって引き揚げる。これが博多式マナーであり、そこには一種の都市的洗練といったものが感じられるとしている。その上で中村は、この論文を次のような言葉で締めくくっている。

人々が博多山笠のよさとして指摘する点を列挙する余裕はないが、ある人が「山笠は博多のすべてだ」といったように、そこには博多の人たちの生活の美意識、行動の美学といったものが、行事の隅々に至るまで反映していることは確かである。祭りは博多的なアーバンイズム（都市的生活様式）、あるいはアーバンティニーの集約的表現であるように思われる〔中村1986:184〕。

以上が「博多祇園山笠」の簡単な内容紹介であるが、ここでも角館の祭礼を扱った論文を分析した際に指摘した2つの特徴を見出すことができるだろう。「博多祇園山笠」でも祭礼を社会的な出来事として記述するスタイルがとられ、どういった立場の人たちが、どのような機会に、いかなる行動をとるのかといった点に重きがおかれていた。また、直前で示した引用文を見ると、祭礼に町の気風が反映されるとする視座を確認することもできる。中村はやはり、この祭礼にも、博多の人々の美意識・美学が反映されていると考えていたようである。

2-4. アーバニティーとは何か

このように見てくると、この論文も、それまでの3つの論考とほぼ同じような構成をしていたとっていい。但し、「博多祇園山笠」の中では、「アーバニティー」という聞きなれない言葉が使用されていた点に注意する必要がある。この言葉は、これまでの中村の論文の中で見ることはなかった。いったい彼女は、この「アーバニティー」という語を、いかなる意味で用いていたのであろうか。この点について、中村は次のように述べている。やや長くなるが、関係箇所を引用したい。

これまでアーバニズム urbanism の術語は、世界各地の様々な時代の都市ないしは都市的集落に共通する特性、あるいは生活様式として捉えられてきた。しかし、小論で筆者が問題にするのは、むしろ個々の都市に固有の、あるいは当該都市の市民が、これこそ我々に特有の文化あるいは生活様式であると考えているところのものである。筆者は別の著作で、主観、客観の両面から捉えられるある民族の民族らしさを表わす用語として、従来の民族性 Ethnic Character に代るものとして、エスニシティーの用語を使うべきことを提唱した。そのひそみにならばここでも、アーバニズムより、アーバニティーの方が、問題の所在を示すのに、より適切であるようにも思われる〔同：185〕。

中村によると、「博多祇園山笠」の中で彼女が目にしたことは、「個々の都市に固有の、あるいは当該都市の市民が、これこそ我々に特有の文化あるいは生活様式であると考えているところのもの」であり、それはアーバニズムではなくアーバニティーと表記した方が適切であるという。あるいはこのアーバニティーという概念は、「エスニシティー」という語にならって構想されたものであるという主張に留意するならば、アーバニティーは「ある都市の都市らしさ」としてとらえることもできる。このように考えてくると、これまで中村の祭礼研究の中で指摘されてきた祭礼に反映されるという町の気風は、まさにこのアーバニティーであったといえよう。

2-5. 中村孚美の祭礼論の特徴

ここまで、中村孚美によって書かれた祭礼研究を概観してきた。その結果、彼女の論文はどれも同じような問題意識に貫かれており、しかも各論文の章立ても似通っていたことが理解できた。彼女が著した祭礼に関する4本の論文において、中村が明らかにしようとしたことは、祭礼のありよう（行事構成や運営組織など）、各祭礼の特徴の明示、アーバニティーの抽出の3点であったと思われる⁶⁾。これら3つのうち、祭礼のありようについては、とりたてて指摘することはない。だが、他の2つについては、少々考え

なくてはならないことがあるように思われる。まず、各祭礼の特徴の明示に関していうと、当該の祭礼の特徴とされたものが、どのようにして「特徴」と認定されたのかが不明確である。それは別の祭礼と比較することによって認定されたのか、それも単にインフォーマントたちの認識にしたがっただけなのか（「博多祇園山笠」の場合はこれにあたるかもしれない）、あるいは中村の個人的な判断によるものなのか。この「何ををもって特徴とするのか」という点については、現代の視点からすると、オリエンタリズム批判や民族誌における真正性の問題とも関わってくるだけに、特徴の認定過程を明確にしておいた方がよかったのではないかと考える。

また、アーバニティーをめぐる問題については、第1にアーバニティーが祭礼に反映されるメカニズムがはっきりとしない。なぜそしてどのようにして、「ある都市の都市らしさ」が祭礼の中に映りこむのであろうか。また、アーバニティーを抽出することの意味とは何だったのかが、いまひとつ明確にならない。この問題については、彼女の論考を読む限り、ほとんど意識されていなかったように思われる。さらに、これらの疑問とは別に、中村の祭礼研究には根本的な問題が潜んでいるように思われる。それは、そもそも、なぜ祭礼研究が必要だったのかという問題である。この点についても、中村はこれまで見てきた4本の論考の中で明らかにしていない。

以上のような中村の祭礼研究に見られる諸問題について、彼女がどのように考えていたのかを直接聞きだすことは困難である。だが、彼女は1980年に刊行された『季刊人類学』11-4の中で、米山俊直や松平誠らと対談を行っており〔米山(他)1980:132-135〕、そこで中村は自身がなぜ祭礼研究に携わるようになったのかについて語っている。もっとも、この座談会での彼女の発言は、先に指摘した彼女の祭礼研究に見られた諸問題について必ずしもストレートに回答しているわけではない。しかし、中村が祭礼研究に対して抱いていた構想を、より正確に把握する糸口になるのではないかとと思われる。そこで、ここでは、上記の座談会における彼女の発言に注目してみたい。

2-6. 祭礼研究における中村の構想

すでに見てきたように、彼女の最初の祭礼研究において事例とされたのは角館の祭礼であった。しかし、きわめて興味深いことに、彼女は当初、この祭礼を調査研究する予定ではなかったらしい。もともとは角館郊外の農村を調査するはずだったのであるが、角館の祭礼が近づいていたので、「ついでにと思い」祭礼のことを聞いてみたのだという。すると、インフォーマントたちが目を輝かせてわれ先に話を始めたので、皆が喜々として話したがる祭礼を調査研究してみようと思ったのが、きっかけであったとしている。その成果は、上述の通り、「町と祭り」と題された論文として『日本民俗学』77に掲載された。彼女は、その論文の抜き刷りを角館の人々に配ったところ、皆が喜んだという。そうしたフィールドでの反響もあって、中村は、たとえ学界で認められなくても自分な

りに祭礼を研究してみようという気になったのだとしている。その際、方法論的にはまったくの手さぐりであったようであるが、それでもとにかく、祭りを支えている人たちが「これが自分たちの祭りだ」と感じているところのもの、喜びとしていること、哀しみのようなものをとらえたいと思っていたという。もちろん、研究者である以上、現地の人気がづかなかった側面、彼らが「そういわれてみればそうだ」と思うようなことも明らかにしたいと考えていたとしている。こうした祭礼研究の必要性や意義について、中村自身、座談会の中で明確に語っていない。しかし、祭りのときには人々が解放的になるため、彼らの行動が見やすくなると指摘している点は注目に値する。しかも、彼女は、この指摘の直後に次のように述べている。

文化人類学でいう文化に対するアプローチのしかたには、いろいろなやりかたがあるかもしれませんが、私流にお祭りから入ってもよいのではないか、というところから入っていったわけです〔米山(他)1980:134〕。

そうした発言からすると、彼女は祭礼を契機として、その担い手たちがもつ文化に迫ろうとしていたものと考えられる。しかし、なぜ祭礼を契機としなくてはならなかったのだろうか。それは、彼女も指摘しているように、祭礼のときというのは担い手たちが他者に対して解放的に振る舞うようになるからに他ならない。中村の祭礼研究は、このような構想のもとに行われていたのである⁷⁾。

このように、ここでは1980年に刊行された『季刊人類学』11-4に掲載された座談会での中村の発言に注目し、彼女の祭礼研究の構想について見てきた。その結果、そこで把握することのできた彼女の構想は、彼女の祭礼研究に関する4本の論文が抱えていた問題点のいくつかを、具体的にいえばアーバニティーを抽出することの意味と祭礼研究の必要性について、明確にしてくれたように思われる。まず、前者に関して、彼女が述べていた祭礼を契機として担い手たちの文化に迫りたいという問題意識は、各論文の中で祭礼の特徴を明示したり、アーバニティーを抽出したりしていたことと、深く結びついていると考えることができる。しかも、祭礼とは、担い手たちが解放的になる瞬間でもあるため、そうした機会を利用して彼らの文化に迫る。祭礼にはこのような利点があるからこそ、中村はそれを研究してみる価値があると考えていたものと思われる。だが、そのようにして得られた知見は、どれほど斬新なものだったのであろうか。確かに、他者の文化を理解することは文化人類学の中心的な課題の1つであるが、日本の地方都市の祭礼の特徴や、その町の気風、さらにはそこで暮らす人々の価値観等を描くことによって、いかなる知の地平が開かれたのであろうか。少なくとも、現在の視点から眺めてみると、彼女の研究はそうした点に対する配慮がやや足りなかったのではないかという思いがしないでもない。

1970年代以降、精力的に祭礼研究に取り組んだ中村孚美は、社会的な出来事として祭礼を記述するスタイルを採用することで、秀逸なモノグラフを残した。筆者個人としては彼女の研究に強く惹かれるものの、他方で祭礼を記述することに力点がおかれすぎており、研究のもつ意義についてあまり自覚的ではなかったのではないかといわざるを得ない。そうしたことと、あるいは密接に関係するのかもしれないが、近年、中村の研究を参考文献にあげる論文をほとんど見かけなくなってしまった。

3. 米山俊直の祭礼研究

3-1. 米山の問題意識

3-1-1. 手段としての祭礼研究

1972年に2本の論文を発表した中村孚美が、しばらく祭礼研究から遠ざかっていたころ、彼女に代わってこの分野を牽引したのは米山俊直であった。米山は祇園祭、天神祭、神戸まつりなどの調査研究を行い、その成果を数冊の書物にまとめあげている。だが、そもそも彼は、なぜ祭礼研究に携わるようになったのだろうか。結論から先にいえば、それは米山が祭礼研究の必要性を認識していたからである。彼は次のように述べている。

近年、日本各地の祭りが、ふたたびさかんになってきている。——(中略)——このような現象をどうみるか、世相史的にも、都市人類学的にも興味深いことである。もともと人類学にとって、祭りが重要な研究対象であったことは、あらためていうまでもない。——(中略)——

とはいえ、今日の現象を理解するためには、祭り、ことに都市の祭りについての、より一層の研究が望まれる〔米山1972:191〕。

この文章は、中村孚美の論文「秩父祭り」が『季刊人類学』3-4に掲載されたときに、中村の論文に対して米山が寄せたコメントの中の一節である。そこでは、今日の現象を理解するために「祭り、ことに都市の祭り」を研究する必要があると指摘されている。だが、こうした指摘は、1974年に刊行された『祇園祭——都市人類学ことはじめ——』の中で微修正されることとなる。そこでは、祭礼を通して理解すべき対象が、「今日の現象」から「都市」へと変わっているのである。米山は、『祇園祭』の中でも中村の「秩父祭り」に触れ、祭礼の過程を描くことで「それを支える人々の文化、社会のシステムを追求した」と評している〔米山1974:13〕。その上で、彼は以下のように主張する。

都市という、複雑な構成をもち、多様な要素をふくむコンプレックスを、人類学の立場から本格的に解明してゆこうとするときに、この中村さんの“秩父祭調査”は、ひとつのモデルになる。つまり祭をひとつの切り口にして、都市の複合体に接近するという、たいへん有力な手法になるのではないか〔同〕。

このような主張からも、米山がどれだけ中村の研究を高く評価しているのかが理解できよう。それとともに、「祭をひとつの切り口にして、都市の複合体に接近する」と述べられていることは注目に値する。あるいは、この引用文の少し前で、「都市研究の手がかりに、祇園祭を研究する」ともいつている〔同：12〕。似たような見解は、1986年に出版された『都市と祭りの人類学』の中でも述べられており、そこでは、都市の現状と性格をとらえその本質を解明するために、祭礼の調査研究が有効であるとされている〔米山1986：17〕。以上からすると、『祇園祭』あたりを境に、米山の問題意識の中で祭礼の研究を通して理解されるべき対象が、「今日の現象」から「都市」へと変化したと見ていいだろう⁸⁾。

3-1-2. なぜ都市か

では、なぜ都市なのか。都市を研究することの必要性は、どこにあるのだろうか。この疑問に対して、米山は2つの理由をあげている〔同：8-11〕。1つは現代的な理由である。米山によると、現在の日本は都市化の波に洗われているという。それは例えば、職業の多様化や、電話・自動車などの“都市的生活様式”の普及、さらにはマス・メディアの発達による情報格差の縮小などからも明らかである。このような状況を踏まえると、仮に日本をフィールドとするならば、日本の都市についての理解を前提にしない限り、日本社会や日本文化などについて論究・批評することもできないのではないか。これが、米山の考える都市研究が必要な理由の1つである。さらに、米山は伝播論的な理由からも、都市研究が必要であると考えていた。彼によると、そもそも文化の要素というものはその創造・革新のセンターがあって、そこから地方へ伝播・普及してゆくのだという。しかも、そうした文化のセンターは、もともと都市的な場だったのではないかと米山は指摘する。さらに、外国文化の受容もまた都市的なセンターを介して行われ、同じようなプロセスで地方に普及し、地方文化を充実させていくのではないかとしている。とするならば、この経緯を抜きにして、あるいはそうした都市と地方との関係性を考慮することなくして、ある地方の文化を単独で扱ってみても、それはしよせん片手落ちであろう。そうした観点からしても、都市研究は必要なのである。以上が米山の考える都市研究が必要な2つめの理由である。興味深いことに、彼によると、これら2つの理由は日本にのみあてはまるものではないという。いわゆる“都市化の現象”は、世界的なスケールで始まっている文化変容のひとつの流れであり、また都市の歴史は人類史

と同じくらい古く、人類の文化は都市的要素抜きには論じることができないともいえる。それにもかからず、これまでの文化人類学は伝統的な狩猟民、農耕民、牧畜民社会に研究を集中しており、都市研究は手薄で都市への関心も低い。人間の科学を標榜する文化人類学が、この有様ではふがいない。だからこそ、都市人類学の必要があるのではないか。米山はそう主張するのである。

このような見解にもとづいて、彼は祭礼研究さらには都市研究に携わるようになったわけであるが、それではそうした米山の祭礼研究の特徴とはどのようなものであったのだろうか。この点を考えていくために、以降では、米山によって著された『祇園祭』と『天神祭』を見ていくことにする⁹⁾。

3-2. 『祇園祭』

3-2-1. 『祇園祭』の構成

まずは『祇園祭』から見てみたい。5章からなる本書は、「序章 私たちの調査の経緯」において、祇園祭を調査することになったいきさつが、先にあげた問題意識とともに綴られている。その後、「1章 山鉦町」では、祇園祭において山や鉦を出す町内の組織やその編成についての解説がなされ、「2章 宵山まで」および「3章 宵山と巡行」で祭礼の準備から山鉦巡行までの行事が紹介される。特に3章では、各行事が進行していく際に、多様な参加者たち、たとえば町内の人々、警察、観光客、露店、マス・メディアなどがどのように動くのかについて詳述されている。さらに「4章 八坂の神事と風流」では、八坂神社関連の行事（いわゆる神事）についての解説がなされる。また、氏子以外の人々によって行われるさまざまな奉納行事（献茶会、狂言奉納、琵琶奉納など）や、合同パレードの誕生によって消滅した「あとのまつり」の穴を埋めるために作られた花傘巡行についても説明している。

このように、序章から4章までは、どちらかといえばモノグラフとしての性格が強いといえる。それに対して、「終章 歴史といまと」では、これまでの記述を整理しながら、いくつかの鋭い指摘がなされる。この終章の書き出しは、「祇園祭——それは、まるで大きい建築物のようだ。さまざまな人々が、さまざまなかたちでそれに参加し、みやこの中心部を一ヵ月にわたってまきこんでゆく」という言葉で始まる〔米山1974:190〕。確かに、祇園祭には様々な人々が関わっていた。米山があげるところによれば、町の旦那衆、大工方、手伝方、車方、囃子方、アルバイト学生の曳き方、露天商、交通機関、警察、観光業者、行政当局、見物人など多様である。こうした参加者たちの間には役割、立場、見方にそれぞれ違いがある。そのため、ときに対立や緊張も見られるが、しかし興味深いことに、それ自体が祭礼のムードをつくる要素になって祭礼は進行していくのである。このようなことが可能となる理由を、米山は、参加者たちの自発的・主体的な参加意識、「自分たちが出なければ、この祭りは動かない」という意識に求めている〔同:192〕。

しかし、祇園祭に関わる人々はかなりの人数に上る。そのような大勢の人々が、自発的・主体的に参加しようとするのはなぜなのであるか。米山は、その理由の1つとして、祭礼が社会的に許された遊びの機会であるからではないかと指摘する。しかも、カイヨワの遊びの4要素の中で祇園祭にふさわしいのは“めまい”であり、人々はこの雰囲気の中で不思議な生きがいを実感しているのではないかと述べている。これらが、人々に対して、祇園祭に自発的・主体的に参加するよう促す要因となっているわけである。しかし、そうした“めまい”と“生きがい”は、祇園祭に限らず、どんな種類の祭りにもいえることである。これらとは別に、ミヤコの祭りとしての祇園祭には、特有の参加意識をうながす要素があるのだろうか。このような問いに対して米山は、「ミヤコ」の性格から説き起こす。彼によると、ミヤコとは、もともと多様な人々が集まる場であるため、そこでの祭礼は農山漁村の祭りとおのずから原理が異なるという。農山漁村では、生業の繁栄や村または一族の祖先の祭祀が祭りの原理となっていたであろうが、多様な人々と多様な生業を前提とする都市では、人々を包み込む原理は別のものであるはずである。祇園祭の場合、それは「厄除け」であったと米山はいう。よく知られていることであるが、祇園祭の起源は祇園御霊会であり、天災や疫病などの災厄を免れるために始められたとされている。この厄除け、特に疫病を除けたいという心情は、当時の都に住む人々の共通の関心であったに違いなく、またこの関心は今日の私たちの中にも存在しているのかもしれないと、彼は指摘する。私たちの周辺には、様々な公害、交通禍、インフレ、不況、戦争の恐怖などといった新しい災厄があり、それらが私たちに不安や恐怖を付与しているのである。祇園祭の山鉦巡行の際に、ときおり投げられる厄除けの意味をもつ「ちまき」を人々が奪いあうのは、厄除けを求めるといふ都市生活者に共通の心情が流れているからではないか。だとするならば、祇園祭は“観光資源”になりすぎたという批判に見られるような、観光と信仰を区別するという姿勢は、実はナンセンスなのではないか。このように米山は奥深い指摘を行っている。

ところで、直前で触れた“観光資源”としての祇園祭批判は、戦後に次々と行われた山鉦巡行コースの変更や、本来別々の日に行われていた「さきのまつり」と「あとのまつり」の巡行を1日でやるようにしたことによって出てきたものである。これに対して米山は、巡行コースの変更や、あとのまつりの穴埋めとして発案された花傘巡行の付加といった祇園祭の変化は、創造と表現の意欲のあらわれであると論じた上で、次のように述べている。

かつてそうだったように、もっと自由な創造と表現の場を、この祭につけくわえてゆく工夫があれば、祇園祭はさらにたのしいものになるにちがいない。市の当局者が観光や文化財保護という側面だけに力を入れ、また八坂神社が神事ということにこだわって、祭のエネルギーのもつ創造性を忘れては、この祭は古めかしい博

物館のような、活気のないものになってしまいかねないのである。風流・芸能のもつ幅広い創造のエネルギーを、忘れてはならないだろう〔米山1974:205〕。

ここでは、祇園祭の変化、すなわち創造性をポジティブに評価すべきだとする見解が前面に押し出されているが、その一方で米山は、こうした変化や創造性が新しい時代に適応しようとして行われる、祭礼のありようの模索の結果であることも見逃してはいない。もちろん、そうしたことは祇園祭に限ったことではない。日本各地で祭りが復活している一方で、とりわけ地方の町や村の祭りは、激しい社会変動の波にさらされているとも指摘している。

以上が『祇園祭』の大まかな内容であるが、最後に米山は本書全体を評して、「この本の中かで、祭についてめぐらしてきた考察の多くは、そのまま都市の原点——その基本的性格についても適用できるのではないだろうか」と述べている〔同:211〕。彼の見るところ、都市のもつ以下のような側面が祭礼と似通っているのだという。それらを列挙すると、都市とは自発的な参加者（居住者）の自由なめまいと生きがいと期待すること、その生活の維持のために災厄の忌避を期待すること、そうした共通の心情がハレの日を作り出し、そこに創造と表現の機会を創出すること、人々の自由を前提とした自治・自衛の組織として都市的コミュニティが組織されていること、さらに都市生活は現在大きな危険にさらされていること、の5点である。そうした類似性があるからこそ、祭礼について考えてきたことは、そのまま都市の問題につながるのではないかというのである。だが、これらのことは指摘されるのみであって、それ以上の分析はなされていない。そうしたこともあってか、米山は、祭礼を媒介とした都市研究はまだまだ出発点にすぎないといつけ加える。この『祇園祭』という本には、「都市人類学ことはじめ」というサブタイトルがつけられているが、都市研究の手がかりに祇園祭を研究するという試みは、「文字通りの事始めである」と米山は本書の末尾に記している〔同:212〕。

3-2-2. 『祇園祭』の特徴

ここまで、米山俊直の『祇園祭』について見てきた。改めて振り返ってみると、本書はどちらかといえば祇園祭を記述することに重きをおいた構成となっていたように思われる。上述したように、本書は5章で構成されているが、そのうち4章までがモノグラフとして描かれており、分量的には全215ページ中187ページ、全体のおよそ87%が4章までにあてられていた。そうした本書の性格について、米山はあとがきで、「【本書の】主眼は、一九七三年の祇園祭の実態を、できるだけ忠実・正確に紹介することにおいた」と述べている〔同:213、【 】は引用者〕。

確かに、本書を一読すれば、1973年の祇園祭がどのように行われていたのか、あるいは当時の祇園祭がいかなる状況のもとで実施されていたのかが、手に取るようにわか

る。そうした観点からすると、本書は筆者のもくろみを見事に達成していたといえる。もちろん、それだけにとどまらず、米山ならではの洞察も随所に見られる。例えば、祭礼における観光と信仰の問題であったり、人々の主体的参加が祭礼を支えるという指摘であったり、主体的参加を動機づける要素（めまいと生きがい）を祭礼が提供しているという主張や、祭礼は時代によって変化するという視点などである。ただ、惜しむらくは、どの問題も深く掘り下げて考察されることはなかった。さらに、本書は、都市研究の手がかりに祇園祭を研究するという目的を掲げてはいたが、祭礼の記述にかなりのスペースが割かれていたためか、祭礼を入り口として都市研究へと至る道筋がはっきりと見えなかったように思われる。そのことは、「祭についてめぐらしてきた考察の多くは、そのまま都市の原点——その基本的性格についても適用できるのではないだろうか」という〔同：211〕、米山の控えめな言葉にも現れていよう。その意味からすると、本書は祭礼研究としても、また都市研究としても、まさしく「ことはじめ」であったといえる。

3-3. 『天神祭』

3-3-1. 『天神祭』の構成

こうして祭礼研究に関わるようになった米山は、『祇園祭』の5年後に『天神祭——大阪の祭礼——』を出版する。そこで、次に『天神祭』を見ていくことで、彼の祭礼研究がどのように深化していったのかについて考えていきたい。1979年に刊行された『天神祭』は10章からなる。まず、「1章 天満天神」で天神信仰の起源や概略が説明される。次いで「2章 祭礼の準備」となるが、この冒頭部分で、米山は「私たちの主目的は、大阪の天神祭の現状を考えることにある」と本書の目的を述べている〔米山1979：28〕。その後、2章では、天満天神（正式名称は大阪天満宮）の紹介やこの祭礼の担い手および準備の概要についての説明がなされる。「3章 宵宮」では7月24日（宵宮）の行事が紹介されるとともに、天神祭の歴史の変遷についても軽く触れられている。そして、「4章 陸渡御・船渡御」において、7月25日に行われる陸渡御・船渡御の概要が説明される。

ここまでは、上述のように紹介や概説が多くを占めてきたが、これ以降、興味深い指摘や分析的な主張が少しずつ多くなっていく。そこで、5章以降は、やや詳しく本書の内容を述べていきたい。「5章 講社組織」では、講社の歴史の変遷が記述される。講社とは、同業者からなる講集団であり天神祭の担い手の1つであるが、この講社を担う母体は時代とともに変化しており、そこでは一般に地縁から社縁へという流れが見られるという。「6章 地盤沈下」では、1953年（昭和28）に船渡御のコースが変更されたことについて解説される。船渡御は、それまで大川を下り堂島川に入って行っていたのであるが、このときの変更によって、逆に天神橋から都島大橋へと川をさかのぼることになった。そうした変更が行われた理由について、米山は、産業活動の一環として地下

水をくみ上げたことによって生じた地盤沈下の影響で、大川にかかっていた橋の橋桁が下がってしまったためであると報告している。だが、船渡御におけるこのようなコース変更は、2つの意味で大変革であったという。それは第1に、この変化によって神事としての船渡御の否定あるいは逸脱が生じてしまったことである。もともと船渡御は銚流しの神事と深くかかわっていた。銚流しの神事とは、神童が神銚を大川に投げ入れる行事であり、かつては銚が漂着したところを御旅所として船渡御をしていた。それがコース変更によって、下流の御旅所にゆくという目的が失われてしまったのである。さらに、このコース変更が大変革であったことの2つめの意味として、大阪の中枢部が祭礼の舞台から排除されてしまったことをあげている。これによって、天神祭の華やかさ、ページェント性が失われてしまったという。

「7章 大阪の変貌」では、大阪の衰退の様子が語られる。大阪は近世期、江戸、京とならぶ経済・文化・学芸の中心地として栄えた。よく知られているように、大阪はとりわけ商業活動の中心地であった。それが近代に入ると商都から工業都市へ、ソロバンの町から“煙の都”へと変貌を遂げ、“東洋のマンチェスター”ともいわれるようになった。そうした中、大阪の国内工業生産額は1931年までトップであったが、翌年に東京に抜かれ2位に転落してしまった。その後の大阪は、工業面のみならず文化面でも東京の後塵を拝している。こうした状況について米山は、「物理的地盤沈下とひっかけて、大阪の地盤沈下がいわれはじめて久しい」としている〔同：154〕。続く「8章 信仰か観光か」では、前章からの流れを受けて、大阪の近代100年の変貌のなかで天神祭がどう変わったのかが問われることになる。彼はまず、調査をしてみて気づいたこととして、1万人の参加者と100万人を超える見物人とを動員するこれだけ大規模な祭礼が、全体的に何か遠慮がちであると指摘する。祇園祭と異なり、天神祭では、ハレ（祭礼）がケ（日常性）に対して遠慮しているようだと言及する。なぜ、天神祭はこのような状態になってしまったのだろうか。その理由として、米山は、大阪が工業化を進め労働や利益に力点をおいたためにハレが萎縮してしまったこと、さらには国家神道の影響によると考えられる儀式や神聖性の強調——これを米山は「神道の純化」と呼んでいる〔同：178〕——によって、民衆の祭礼への内発的な参加動機と喜びが失われてしまったことをあげている。要するに、天神祭におけるハレは、これら2つの理由によって希薄化してしまったのである。さらに、米山は、これら2つの理由のうち後者についてももう少し言葉を費やしており、そうした神道の純化は民衆の祭礼に集うエネルギーにそぐわないとした上で、以下のように主張している。

神事は神事であり、別に祭礼をにぎやかにする必要などない、という神道の純化の考え方は、祭礼に対する正しい見方とはいえないだろう。神社は氏子があつての神社であり、祭礼は参加者や見物人がたのしんではじめて祭礼なのだから〔同：179〕。

こうした指摘は、『祇園祭』の中でも議論されていた「祭礼は信仰か観光か」という問題とも、つながるように思われる。実際、米山は本章において再びこの問題を取り上げ、「信仰か観光か、とひらき直って議論する必要はあるまい。——(中略)——祭礼はもともと、そのような重層性をもっているものなのであろう」と自身の見解を述べている。

次いで「9章 祭礼のデザイン」では、天神祭の全体構成と部分のディテールの点検が試みられる。その結果、「どうしても以前に調査した祇園祭との比較をすることになり、天神祭にからい点をつけてしまうことになる」としている〔同：204、傍点は米山〕。なぜ、そうなるのであろうか。その理由は、8章で指摘されたことでもあるが、京都が“煙の都”にならなかったために、ハレの空間を広々ととる伝統が残されているからだと説明する。さらにまた、そうしたハレの空間を回復し、コムニタスを作り出すためには演出家が必要なのではないかと米山はいう。そのような演出家、あるいはトータル・プロデューサー、リーダーの類は今宮戎や祇園祭にもおり、彼らのような「その見識・力量において、またその経歴や社会的地位において、立派な知恵者たちがいて、伝統の祭礼をたえず新鮮なものに作りあげている」からこそ〔同：208〕、ハレがハレとして維持されているのだと、米山は考えているようである。こうした演出を行うだけの能力を備えた人物が大阪にもいるはずであるが、顕在化していないのが実情である。米山はこのような状況を憂い、「そういう人材が登場することを、願わずにはいられない」と述べている〔同〕。

最後は「10章 都市の祭礼のこれから」である。ここでは、祇園祭と天神祭の比較が行われ、両祭礼の共通点および相違点が明らかにされる。それによると、2つの祭礼とも、日本の三大祭に入っていること、全国に分布する天神信仰・祇園信仰の中心であること、祭礼の起源が御霊信仰であったこと、農耕暦から独立した夏祭りであったこと、祭礼の担い手が商人であることといった共通点をもつ一方で、祭祀組織は地縁的か社縁的か、行政による文化財保護があるのかないのか、祭礼が景気に左右されるか否か、といった点で違いが見られるという。こうした比較の結果、やはり米山は天神祭に「からい点」をつけている。とはいえ、これら2つの祭礼が、ともに100万の群衆を集めているという事実には強い関心を寄せていいという。この数字は、2つの祭礼がともかく市民のある種のニーズないしは願望に答えていることを意味していると、米山は見ている。そのニーズや願望とは、もちろんハレの日の解放感である。考えてみると、日本文化は、そうした解放感を制限し続けてきた。また、明治以後の“近代産業都市”の発達は、祭礼を契機とした芸能の洗練などを片隅に追いやってしまった。さらに、いわゆる国家神道の流れが、祭礼を雲の上の儀式のように方向づけ氏子たちとの乖離を強めた。しかしながら、人々のニーズないし願望の強さは、なお祭礼をさかんにし数々の風流をつけ加える方向に進んでいるのだと、米山は指摘する。全国的な祭礼復興の気運は、旅行者

や寺社側の策略だけでなく、民衆が動き、その気運を作っていると考えることもできる。その意味からすると、民衆は間違いなくハレの解放の機会を祭礼の中に求めようとしているのであるから、彼らの日常性からの離脱・解放のときを提供するのは為政者の責務ではないか。このように米山は述べて、本章を締めくくっている。

3-3-2. 『天神祭』の特徴

以上、米山によって1979年に刊行された『天神祭』の内容について見てきた。本書では、前著『祇園祭』と比べて、かなり分析的な論述が増えているように思われる。しかし、それでも、2章で述べられた「私たちの主目的は、大阪の天神祭の現状を考えることにある」という目的の故にか〔米山1979:28〕、あるいは本書が新書として出版されたことに由来するからか、ここでは1つの論点を深く掘り下げて考察するというよりは、天神祭がどのように実施されているのか、なぜ現在のようになつたのかといった問題に力点がおかれていた。このため、どちらかといえば、記述的な性格の強い研究であったといえよう。しかしながら、本書も前著に劣らず、目配りはきわめていい。例えば、『天神祭』の中では、後に松平誠によって理論化されることになる祭礼の担い手の変化、すなわち地縁から社縁へという流れが指摘されていたり〔松平1990〕、『祇園祭』に引き続き、「祭礼は信仰か観光か」という問いの無意味さが主張されたりもしていた。さらに、こちらも前作同様、風流の存在も指摘されていたが、今回はそれだけにとどまらず、伝統行事の「古式ゆかしい」というイメージが誤りであることを主張することで、伝統が創られることを明らかにした¹⁰⁾。

また、この『天神祭』は、全体的に近代批判が中心主題となっていたといえる。その兆候は、社縁が担う天神祭は景気によって左右される不安定な祭礼であると主張した、5章あたりから見ることができる。しかし、近代批判としての本書の性格がはっきりと前面に押し出されるのは、やはり8章であろう。そこでは、天神祭におけるハレの希薄化を、大阪の工業都市化や神道の純化に求めている。だが、そのような現象は、大阪ほどではないかもしれないが、おそらく全国でも見られたものと思われる。だとするならば、もう少し広い視野からこの点を考察してもよかったのではないだろうか。

ところで、こうした近代批判がどのようにして紡ぎ出されたのかについても、触れておく必要があると考えている。それについて、米山は次のように述べている。やや長くなるが、関係箇所を引用する。

大阪の近代百年の変貌のなかで、天神祭はどのように変わってきたらうか。それを考えることは、とりもなおさず天神祭を軸にして、町がどう推移してきたかを見ることである。

私たちが調査をしてみて気がつくことは、これだけ大規模な祭礼—— 一万人の

参加者と百万人をこえる見物人！ ——が、全体として何かたいへん遠慮がちなところがある、という印象であった。——(中略)——

——祇園祭とはちがう。

私たちはそんな気持を抱いた〔米山1979:172-174〕。

以上からすると、米山が天神祭におけるハレの希薄化に気づいたのは、天神祭の調査を通してであり、なおかつ祇園祭との比較を通してであったことがわかる。もちろん、このような「気づき」のプロセス自体に、問題があるわけではない。重要なことは、こうした気づきを、いかなるコンテクストに位置づけて理解するかである。米山は、すでに指摘したように、天神祭におけるハレの希薄化を大阪という地域社会の変動や近代日本の宗教政策によってもたらされたと解釈した。つまり、ここで採用されている思考方法は、なぜ当該の祭礼が現在のような姿で存在しているのかを、地域社会の変動なり日本の近代化なりといった、祭礼を取り巻くよりマクロな社会的・文化的環境と関係づけることによって読み解こうとするものである。こうした思考方法こそ、米山が『祇園祭』の中で述べた、都市研究の手がかりとして祭礼を研究するということなのであろうか。仮にそうであったとするならば、前著の中で提唱された方法論が、ここにおいて具現化されたということができよう。

3-4. 米山俊直の祭礼論の特徴

すでに見た通り、米山にとって祭礼研究は、都市を研究するための手がかりとして位置づけられていた。このような方法論は『祇園祭』の中で示されていたが、それが形となって現れるのは『天神祭』においてであったといえるのかもしれない。だが奇妙なことに、米山は『天神祭』の中でこの方法論についてまったく触れていない。このため『天神祭』では、そうした方法論を放棄したのではないかという懸念さえ生じる。この点について、米山は、1986年に出版された『ドキュメント 祇園祭』の中で次のように論じている。

大都市の祭礼ないしイベントを媒介として、そこに住む人びとの生活・文化の実態を調査するという方法を、私は私の都市人類学的手法として採用し、それを京阪神三都市において実際に試みてみたのである〔米山(編)1986:iv〕。

表現に微妙な差異が見受けられるものの、こうした主張からすると、『天神祭』においても都市研究の手がかりに祭礼を研究するという方法論は堅持されていたと考えていまいだろう。直前で確認したように、この方法論は、なぜ祭礼が現在のような形態であるのかを、よりマクロな環境と関連づけて解釈することで、何らかの知見を得ようとする

ものであったと見ていいのかもしれない。もっとも、仮にそうであったとしても、そうした作業自体は現在の祭礼研究者も一般に行っていることでもあり、とりたてて論難する必要もない。ただ問題は、これによって米山が都市の何を明らかにしたのかである。そのことについて、『祇園祭』ではいまひとつ明確にならなかったが、『天神祭』の中で彼が析出したものは、労働や利益に力点を置いた“煙の都”あるいは近代工業都市としての大阪の姿であり、神道の純化によって祭礼への内発的な参加動機と喜びを失ってしまった担い手たちの様子であった。『天神祭』が出版された当時、こうした指摘がどれほど目新しいものであったのかは不明である。しかし、現在の視点からすると、できればもう1歩踏み込んで議論を展開してほしかったという感想を、どうしても抱いてしまう。例えば、『天神祭』の中ではこの祭礼と祇園祭とが比較されていたが、天神祭に比べてポジティブに評価されることの多かった祇園祭について、再度検討してみてもよかったのではないと思われる。確かに、京都は“煙の都”、近代工業都市とはならなかったが、だからといって近世都市のままであったはずもない。大阪同様、近代化や資本主義・産業主義の影響を受けていたであろうし、神道の純化の影響も多かれ少なかれ経験していたものと思われる。にもかかわらず、なぜ祇園祭では、天神祭と比べてハレの希薄化が進行しなかったのだろうか。“煙の都”になるということは、それほどまでに大きな影響を人々の生活文化に及ぼすものなのであろうか。あるいはまた、米山は『天神祭』の9章で、天神祭がハレを回復できないでいる要因の1つに、この祭礼を絶えず新鮮なものに作り上げていく演出家がいなことをあげている。だが、そのような演出家が祇園祭には現れて天神祭に現れないのは、いかなる理由によるのであろうか。こうした問題にも取り組んでいけば、祭礼とよりマクロな社会的・文化的環境との関係性について、さらには祭礼とそれを演出する人材との関わりについて、深く掘り下げて考察していくような研究を切り開くこともできたのではないだろうか。

また、これまで何度も指摘しているように、米山は祭礼研究を通して都市を研究しようとしていたが、よくよく彼の『祇園祭』と『天神祭』を読み返してみると、米山が明らかにしようとした都市の様相には、近代化や神道の純化の影響をこうむった都市というイメージとは異なる姿があったようにも思われる。それは彼の都市理解とも関係している。すでに述べたように、米山は、都市を文化の創造・革新の場としてとらえていたが〔米山1974：9-10、1986：59〕、これこそ彼が祭礼研究を通して明らかにしたかった都市の姿ではないだろうか¹¹⁾。このように考えてみると、米山が祭礼の変化や風流に特に注目していた理由も理解できよう。さらに、『天神祭』の結論部で、風流を生み出す民衆のニーズの重要性を強調していたことも、また逆に創造性・革新性を阻害するもの、たとえば近代化や国家神道などを批判していたことも理解可能となろう〔米山：1979：172-179〕。以上からすると、米山は自身の祭礼研究において、祭礼という都市で見られる文化現象を詳細に論じることで、都市が文化の創造・革新のセンターであることを示

そうとしたのではないかと思われる¹²⁾。

いずれにしても、米山の祭礼研究の特徴は、祭礼を都市研究の手がかりとして位置づけつつ、非常に精緻な祭礼の記述を行ったことや、民衆のもつ祭礼への願望を称揚することで日常性からの解放の必要を強調したこと、人々の祭礼への自発的参加を前提として考えていたことなどをあげることができよう。さらに、看過してはならないこととして、祭礼の変容に対する強い関心、当該の祭礼がなぜ現在のような姿となったのか、そのときの社会的・文化的環境はどうなっていたのか、といった問題を注意深く扱っていたことを指摘しなくてはならない。おそらく、そのことと関係しているものと思われるが、一部で『祇園祭』および『天神祭』には、現在の祭礼研究が取り組んでいるすべてのテーマが凝縮されているともいわれている。ただ、惜しむらくは、こうした現象への気づきも基本的には指摘だけにとどまり、深く分析されることはなかった。逆にいえば、そうした作業は、筆者を含めた現役の祭礼研究者に任された課題なのかもしれない。

4. 結びにかえて

以上、本稿では、日本における祭礼研究の草創期に活躍した中村孚美と米山俊直の研究を振り返ってきた。日本では、両者によって、比較的大規模な祭礼を記述するスタイルが提示された。その際、中村は、祭礼を通して担い手たちの文化に迫るという構想のもと、祭礼を社会的な出来事として記述していった。彼女は、多様な参加者たちがさまざまな役割を遂行しつつ、行事に参加する姿を描くことで、祭礼という1つの複合的集団行動、あるいは協力のシステムを明らかにした〔米山1972:191〕。他方、米山は、都市研究の手がかりとして祭礼研究を行うという視座のもと、祭礼そのものや、それに関わる人々の動き、さらには祭礼を取り囲む環境について丹念に描いた。とりわけ、祭礼の変容に強い関心を示し、個々の祭礼を動態的・歴史的に記述するスタイルを示したといえる。

このように中村・米山の2人は、柳川啓一や藪田稔とは異なる角度から祭礼を研究する方法を開発した点で、高く評価していい。ただ、両者の研究を現在の視点からとらえ直した場合、どうしても少々厳しい評価を下さなければならない。なぜならば、2人の研究は、祭礼を詳細に記述することに重点がおかれていたように思われるからである。確かに、中村のアーバンティニーという概念や、米山の祭礼を手がかりとして都市をとらえるという方法論は、現在でも魅力的である。しかし、これらの可能性を秘めた諸道具は、果たして有効活用されたのであろうか。本稿で示したように、筆者の目には残念ながら、これらの概念・方法論を駆使して祭礼や都市について深く考察されることはなかったように思われる。その意味で、中村・米山の祭礼研究は、研究の方向性を模索していた段階にあったといえるのかもしれない。

いずれにせよ、中村・米山によって切り開かれた祭礼研究は、その後、松平誠や和崎春日らの手によって発展していった。その結果、筆者が大学で専門的に文化人類学や民俗学を学び始めた1990年代初頭ごろ、祭礼研究は1つの研究ジャンルとして確立されていたとあっていいような状況にあった。もちろん、現在でも、祭礼研究として認識される論考が毎年公にされている。その意味で、祭礼研究は、いまでも「盛んに」行われているといえるのかもしれない。だが、それはあくまで論考の数もしくは量に着目した評価であって、質に注目すれば別の評価も可能となろう。筆者の研究も含め、祭礼研究は、人文・社会科学の発展にどれほど寄与しているのだろうか。そこまで大げさにいわずとも、祭礼研究が関係しそうな学問領域、具体的には文化人類学や民俗学、社会学、宗教学等に対して、いかなる知の地平を切り開いて見せたのであろうか。自戒を込めていえば、私たちの研究の意義とはどこにあるのか、祭礼研究はいったい何をなすうのかといった問題について、深く考え直す時期にあるのではないかと思われてならない。

こうしたことを考えていく上で、本稿で明らかにしてきたことが、少しは何かの役に立つのだろうか。今回、中村孚美と米山俊直の祭礼研究を詳細に論じてきたことにより、両者とも祭礼そのものを研究対象としていたというよりは、祭礼を通して何か別のもの、中村の場合は担い手たちの文化やアーバンティニーを、米山は都市を明らかにしようとしていたことがわかった。上述したように、筆者自身は、このような視座に強く惹かれている。ただ、そうした視座によって紡ぎ出された研究成果の意義については、もっと自覚的になる必要があるだろう。何とかして、祭礼を使って分析したからこそ可能となった——逆にいえば、他の事象を用いていたのでは不可能であった——、現代もしくはある時代における日本社会・日本文化の特徴や問題点を鋭くえぐり出すような研究ができないものか。今後、祭礼研究を続けていくにあたり、このようことを意識して取り組んでいきたいと強く考えている。

注

- 1) そうした研究の総称には、祭礼研究のみならず、「都市祭礼研究」、「祝祭研究」、「都市祝祭研究」など、いくつか存在する。本稿では、こうした呼称の違いをあまり考慮することなく祭礼研究と一括して用いることにする。これに対して、中野紀和は祭礼と都市祭礼、さらには祭礼研究と都市祭礼研究との違いを指摘している〔中野2005:206-209〕。この点については、いずれ稿を改めて考えていきたい。
- 2) 飯島吉晴は、この当時の時代背景について、次のように述べている。高度経済成長期、日本国民は、豊かな暮らしを求めてわきめもふらず夢中で働いた〔飯島1998:372〕。その結果、経済発展による豊かさを享受したが、それと同時に近代文明の矛盾を顕現させ、それまでの価値観や現在の生き方を見直す運動も出現した。こうした中で、祭りを含む日本の伝統的なものや民俗的なものに注目する動きが現れ、柳田國男ブームも起こったのである。
- 3) 伊藤によると、日本の祭りは祭儀と祝祭という2つの局面に分けることができ、祭儀は厳粛・荘重の極に近く、祝祭は喧噪・野卑の極に近いという〔伊藤1984:iii〕。日本の祭りを祭儀と祝祭と

- に分けることができるという指摘は、もともと藪田稔によってなされたものであるが〔藪田1990: 58-62〕、これら2局面のうち、一般に祭礼研究では祭儀よりも祝祭に注目する傾向がある。
- 4) 実のところ、こうした表現はやや正確性を欠いている。実際には、「人類学的祭礼研究は、基本的に伝統的都市祭礼をフィールドに成果をあげてきたといえる。以降、現在までの約三十年間、人類学者の日本研究において、『都市祭礼』は常に好ましいテーマであったらし」と福原は述べている〔福原1999: 24〕。一読すればわかるように、福原はやや含みのあるいい方をしている。どうやら彼は、人類学的祭礼研究と民俗学的祭礼研究とを区別しようとしているようである。そうした傾向は中野紀和にも見られるが〔中野2005: 203〕、祭礼研究を人類学的なそれと民俗学的なそれとに弁別することの有効性については、いずれまた考えてみたい。
- 5) 本来であれば、論文「町と祭り」の特徴として、この他に現代的なアレンジが見られる点や祭礼には遊びの要素が含まれるという指摘をあげるべきなのかもしれない。しかし、結論を先取りすれば、これらの事項は中村の他の論文の中でははっきりと見出すことができなかつたために、ここでは取り上げなかつた。ちなみに、祭礼に遊びの要素が含まれるとする中村の指摘に関しては、本稿の注6)も参照のこと。
- 6) この他にも、中村の論考に見られた特徴の1つに、祭礼に遊びの要素が含まれる、もしくは祭礼自体を一種の遊びとしてとらえるという視点があつた。とはいえ、そうした視点は、「町と祭り」や「都市と祭り」の中でははっきりと確認できるものの〔中村1971: 52、1972b: 381〕、「秩父祭り」では見られず、また「博多祇園山笠」の中では、それをうかがわせる言葉はあるが、明言されてはいない。
- 7) この他にも、中村は、祭礼研究の意義らしきものとして、祭礼がそれを支える人たちのライフヒストリーにとって重要な意味をもっているということ、座談会の中で指摘している。祭礼とは、確かに集団行動であるが、担い手たちのライフヒストリーにとっても、悲喜こもごもの思いを与えるものであるとしているのである〔米山(他)1980: 134〕。そういわれてみれば、彼女は「秩父祭り」の中で屋台の前面に立つ「はやし手」と呼ばれる役職に注目し、「秩父祭りは、それを支える町の人々のそれぞれの人生と深く結びついているのである」と述べている〔中村1972a: 189-190〕。だが、このような指摘は秩序立てて論じられているわけではないため、彼女がどこまで祭礼とライフヒストリーとの関係を意識していたのかが、いまひとつ明確にならないこともあり、本文中で取り上げることとはしなかつた。
- 8) とはいえ、実のところ、『季刊人類学』3-4の中で米山の述べていた「今日の現象」が、もともと都市化のことを指していた可能性も否定できない。もっとも、この点について、米山は体系的に論じているわけではない。しかし、注意して『祇園祭』の中の記述を見ていくと、例えば「いま、わが国は全国的に、都市化の波にあらわれている」や〔米山1974: 9、下線は引用者〕、「ことに現代では、都市がわからないと、農村のこともわからなくなっている」〔同: 10、下線は引用者〕、「世界的なスケールでいまはじまっている文化変化のひとつの流れとして“都市化”の現象は見逃すことができないのである」といったように〔同、下線は引用者〕、「いま」や「現代」といった言葉とともに「都市化」もしくは「都市」の語が用いられているのである。米山の認識の中で、両者がどれほど密接な関係にあつたのかについては、さらに掘り下げて検討する必要があるが、米山が「都市」および「都市化」のみならず、「いま」・「現代」にも強い関心をもっていたことだけは確かであろう。
- 9) 米山による祭礼関連の著作には、この他に『都市と祭りの人類学』（1986年、河出書房新社）や『ドキュメント 祇園祭——都市と祭と民衆と——』（1986年、NHK ブックス）などがある。しかし、本稿では、これら2つの著書を真正面から取り上げることはしない。なぜならば、前者はそのタイトル通り、都市と祭礼（祭り）について書かれた論文を1冊にまとめた論集であるため、また後者もまさしくドキュメンタリー色の強い内容となっているため、両書とも米山の思想がそれほど論理

的に系統立てて論じられているわけではないからである。

- 10) もっとも、岩竹美加子が喝破したような伝統が創造される際に見られる政治性への配慮は〔岩竹1996〕、米山の場合、岩竹ほどなされてはいなかったように思われる。
- 11) それにしても、なぜ、都市において文化の創造・革新が可能となるのであろうか。この問いに対して、米山は、人・もの・情報が集まり動くからであると答えている〔米山1986:59〕。
- 12) このような見方ができるのも事実であるが、米山自身、この点をしっかりと自覚していたのかは少々疑問である。なぜならば、文化の創造性・革新性に関する記述が、それほど体系的に示されていたわけではないからである。

参考文献

- 阿南透 1997 「伝統的祭りの変貌と新たな祭りの創造」小松和彦(編)『祭りとイベント』小学館, pp. 67-110
- 飯島吉晴 1998 「解説 松平斉光『祭』の今日的意義」松平斉光『祭』平凡社東洋文庫, pp. 371-381
- 伊藤幹治 1984 『宴と日本文化』中公新書
- 岩竹美加子 1996 『民俗学の政治性』未来社
- 藪田稔 1990 『祭りの現象学』弘文堂
- 中野紀和 2005 「祭礼研究の現在——祭礼と都市祭礼——」現代伝承論研究会(編)『現代都市伝承論』岩田書院, pp. 203-224
- 中村孚美 1971 「町と祭り——秋田県角館町の飾山囃子の場合——」『日本民俗学』77, pp. 30-53
- 1972a 「秩父祭り——都市の祭りの社会人類学——」『季刊人類学』3-4, pp. 149-190
- 1972b 「都市と祭り——川越祭りをめぐって——」古野清人教授古稀記念会編『現代諸民族の宗教と文化』社会思想社, pp. 353-384
- 1974a 「都市人類学の課題——サハラ以南のアフリカ都市の研究から——」『民族学研究』38-3・4, pp. 314-322
- 1974b 「都市の概念——その総合的検討のために——」『都市研究報告』46, pp. 5-32
- 1980 「都市人類学」高橋統一(他・著)『文化人類学の視角——伝統と現代——』犀書房, pp. 321-340
- 1984 「都市人類学の展望」中村孚美(編)『現代の人類学2 都市人類学』至文堂, pp. 7-26
- 1986 「博多祇園山笠——そのダイナミクスとアーバニズム——」馬淵東一先生古稀記念論文集編集委員会編『社会人類学の諸問題』第一書房, pp. 161-185
- 福原敏男 1999 「山車を失った都市祭礼——津八幡宮祭礼の戦後——」国立歴史民俗博物館(編)『民俗学の資料論』吉川弘文館, pp. 23-48
- 松平誠 1990 『都市祝祭の社会学』有斐閣
- 柳川啓一 1987 『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房
- 1991 『現代日本人の宗教』法蔵館
- 柳田國男 1998 「日本の祭」『柳田國男全集』第13巻, 筑摩書房, pp. 358-508
- 米山俊直 1972 「コメント」『季刊人類学』3-4, pp. 191-192
- 1974 『祇園祭——都市人類学ことはじめ——』中公新書
- 1979 『天神祭——大阪の祭礼——』中公新書
- 1986 『都市と祭りの人類学』河出書房新社
- 米山俊直(編) 1986 『ドキュメント 祇園祭——都市と祭りと民衆と——』NHK ブックス
- 米山俊直(他) 1980 「座談会 日本の都市の祭り」『季刊人類学』11-4, pp. 127-181